

# 武田科学振興財団杏雨書屋所蔵の 「小野蘭山愛蔵石類」

徳田 誠志・山口 卓也・山下 大輔

## 1 はじめに

関西大学博物館の所蔵品には大阪毎日新聞社社長として活躍し、本学の評議員でもあった本山彦一の考古学コレクションが含まれている。さらにその本山コレクションは、明治政府の高官でもあり、初代人類学会会長としてわが国の考古学黎明期に活躍した神田孝平の収集資料を引き継いでいる。神田がいつ頃から考古学に興味を持ち石器等の収集を始めていたかについては明らかではないが、1884（明治17）年には英文で『Notes on Ancient Stone Implements, &c., of Japan』（日本書名『日本大古石器考』）を刊行していることから、明治政府に出仕し明治4年から兵庫県令を勤めていたころには収集を開始していたものと考えられる。すなわち神田の考古学コレクションは彼自身が採集した資料ではなく、その当時に既に市中に出回っていたものを購入した、あるいは同好の士から譲渡されたものであることが考えられる。よって神田の収集資料は江戸時代に出土した資料、あるいは江戸時代の収集家の手元にあったと考えられるものを含んでいる。

現在博物館では改めて神田コレクションの来歴を検討しているが、これまでに明らかになった江戸時代に存在が確実な資料としては、「浪花の知の巨人」と評された木村兼葭堂が所蔵し、弄石家の第一人者である木内石亭が記録した鋤形石や、同じく兼葭堂が所蔵していた馬形埴輪などがある。

このように本学博物館が所蔵する考古学資料は約250年もの時を伝世し、各時代における知識人の手元を経て、考古学の発展あるいは博物館の成長とともに歩んできた資料といっても過言ではない。しかしながら伝世品であることは発掘された資料と違い、真贋の見極めや、来歴の確認などの手続きを経なければ学術資料として扱うことができないことも忘れてはならない。そこで今回は木村兼葭堂や木内石亭の師にあたる小野蘭山の手元にあったと伝えられている杏雨書屋所蔵品「小野蘭山愛蔵石類」について、本学博物館資料との比較研究のために熟覧、実測図作成等の基礎調査を実施した。すなわち調査の目的は、江戸時代の本草学資料の実態を明らかにすることによって本学所蔵資料との比較検討を行い、その当時に流通していた「モノ」に迫ることである。

調査は2022（令和4）年8月に杏雨書屋にて、徳田・山口・山下の3名によって行った。調査の実施にあたっては、杏雨書屋の百瀬 祐氏、瓢野由美子氏にご高配賜った。冒頭にお名前を記して感謝の意を表したい<sup>1)</sup>。

以下、調査結果について報告していく。なお、文責は文末に括弧書きで表記した。

（徳田）

## 2 杏雨書屋と小野蘭山

本章では今回調査した、「小野蘭山愛蔵石類」について現在の所蔵者である杏雨書屋と、旧所蔵者とされる小野蘭山についてまとめておく。

### (1) 杏雨書屋の概要

現在、杏雨書屋は武田科学振興財団が運営しているが、この書屋の出発点は武田長兵衛商店（現武田薬品工業株式会社）の5代当主である武田長兵衛（1870～1959）が関東大震災で多くの医学、本草学の古典籍が消失してしまったことを悔やみ、私財を投じて医薬にかかる書物の収集を始めたことによる。「杏雨書屋」の名は杏林（医学界）を潤す雨の意味であって、1963（昭和38）年に設立された武田科学振興財団が運営母体となり、1978年からは一般に公開されている。その後、財団設立50周年を迎えて現在地の武田道修町ビル（1928年に建設された武田薬品工業旧本社ビル）に移転し、蔵書の閲覧だけでなく所蔵資料による展示会の開催や研究助成などの活動を行っている。

杏雨書屋の蔵書内容については、小曾戸洋によって紹介されているので細かな言及はしないが、国宝3件、重文14件を含む4万点余り、約15万冊に上る書物を所蔵している（小曾戸 2015）。もちろん現在も収集活動は続いており、小曾戸によれば杏雨書屋の医学、薬学に関する古典籍コレクションは、日本一あるいは世界一といっても過言でない質量を誇っているとされる。

### (2) 小野蘭山について

続いて今回紹介する資料の旧蔵者である小野蘭山（おのらんざん）について、簡単に紹介しておく。小野蘭山は1729（享保14）年に京都で生まれ、1810（文化7）年に江戸で逝去した。享年82歳という当時としては長命を保った人物である。彼を一言で表現するならば、オランダ商館の医師として来日したP.F.v. シーボルトが彼を評して語ったという「日本のリンネ」というものであろう。「リンネ」とはスウェーデンの博物学者で、生物分類を体系化し「分類学の父」と呼ばれた人物である。日本の動植物に大いに興味を持っていたシーボルトにとって、後述する蘭山が著した『本草綱目啓蒙』は座右の図書であったと思われる。

小野蘭山の生涯を概観していくと、16歳の時に松岡恕庵に弟子入りして本草学を学び始めるが、2年ほどで恕庵が逝去するとその後は独学で本草学を身に付けたとされる。その後25歳の時に京都丸太町に「衆芳軒」と名付けた私塾を開く。巣立った門人は千人を超えるとされるが、その中には先述した木村兼葭堂も含まれており、兼葭堂は1784（天明4）年に内門生（上級の弟子）として入塾するに際し、「誓盟状」（国会図書館所蔵）を提出している。この「誓盟状」の内容はかなり厳しい規律を弟子に求めた内容が記述されており、兼葭堂も生半可な気持ちで入門したものではないことがわかる（平野 2011）。

蘭山の京都での研究活動や私塾における弟子の育成は、長期間にわたって大いに繁栄したようである。途中、1788（天明8）年に発生した京都の大火災（「天明の大火」）によって、塾そのものが焼失し多くの蔵書を失うなどの困難もあったが、中国の本草学から脱皮し、わが国の本草学を確立する偉業を成し遂げる。その後、蘭山が71歳の時（1799（寛政11）年）には幕府に召し出されて江戸に下向し、幕府の医学館で本草学を講じることとなる。さらには座して講義をするだ

けではなく、幕命によって1801（享和元）年から1805（文化5）年にかけて、合計6回の採薬旅行に出かけている。その範囲は関東近郊から房総半島一周、さらには紀伊半島の一周に及んでおり、この踏査によって日本各地の動植物、あるいは鉱物の分布状況の把握が可能となったものであろう。

この採薬調査の成果も含めたうえで、彼の代表的な著作である『本草綱目啓蒙』が1803（享和3）年から1805（文化2）年にかけて全48巻27冊の形で初版本が刊行される。この内容は蘭山が江戸で行った講義内容（口述）を、孫である小野職孝（1774～1852）が編集したものであり、蘭山の校閲を経て出版されたものである。その内容は、李時珍（1518～1593）の刊行した『本草綱目』の分類配列に従って動植物と鉱物について、それぞれの和名、異名あるいは方言を記述し、その産地、産出状況、形状、効用などを記述したものである。『本草綱目』は1578（万暦6）年に完成し、1596年に南京で刊行された。わが国には長崎を通じて初版本が輸入され、1607（慶長12）年に林羅山が入手したものを、徳川家康に献上したとされている。しかしながら中国の動植物に基づいた『本草綱目』では日本の動植物、鉱物などに対応するものではなかったことから、日本独自でありかつ最大規模の本草学専門書として『本草綱目啓蒙』が刊行された。すなわちこの書物に収録された1882種におよぶ内容こそが、蘭山の長年の研究にわたる集大成であって、わが国における本草学の最高到達点といえる内容となっている（杉本1974）。

さて、小野蘭山の研究成果が薬草、すなわち植物が中心であることは確かであるが、後述する杏雨書屋所蔵の「小野蘭山愛蔵石類」を理解するためにも、『本草綱目啓蒙』に記載された「石」の記述を見てきたい。小野蘭山の鉱物に関わる研究については大沢真澄による先行研究があるので、その成果に導かれながら記述を進めていこう（大沢 2010）。

大沢が指摘するように『本草綱目啓蒙』と『本草綱目』の石に関する分類はまったく一致し、その中に「霹靂礮（へきれきちん）」という項目を見つけることができる。「霹靂」とは「青天の霹靂」という言葉があるように「雷鳴」のことであり、「礮」とは本来は「砧」の意味であるが、雷鳴をとどろかす際に雷様が使用した「バチ」であるともされている。すなわち「石棒」のような形状を呈する「石器」について、自然石ではないとの判断したものの、いつだれが製作し、何に使用したかが分からないものについて「雷様」の道具として理解しようとしたことが語源であろう。この時代にあっては「雷様」以外にも「天狗」、あるいは「狐」が使用した道具であろうとして、今日の石器（考古遺物）を理解しようとしていたことがわかる。

『本草綱目啓蒙』「霹靂礮」の項目には、「狐ノマサカリ」「テングノマサカリ」として品名を記し、別名として「雷公石」等との表記がある。本文にはおそらく「磨製石斧」のことを説明していると考えられる記述と図があり、その形状や大きさ、石質が記載されている。さらに出土状況「雨後、山中崩土間ヨリ拾ヒ得、或ハ田野ニテモ得。凡石磐アル地ニコレアリ。（句読点筆者）」や、出土地「奥州、羽州、能州、信州、越後、濃州、備前ヨリ出ツ。（同）」が述べられている。この記述からわかるように、蘭山は今日の考古資料である石器についての知識も十分に有していたことが分かる。これは弟子にあたる木内石亭の著作である『雲根志』の内容を吸収していたことから、当時の本草学における「霹靂礮」への理解は十分に身に付けていたことが窺える。いずれにせよ蘭山が植物だけでなく、石（鉱物・薬石・考古資料などを含む）にも関心を寄せていたことと、当時の最先端の知識を身に付けていたことを改めて確認しておきたい。

さて、本項の最後にこの時期に小野蘭山が『本草綱目啓蒙』を上梓した時代背景をまとめておく。本草学誕生の背景には、享保年間（1716～1736）における幕府の財政難がその遠因として指摘できる。すなわち財政難であるからこそ、外国からの薬品の輸入を減らし、日本国内で採集できる薬草への代用が必須となった。しかしながら中国、あるいは朝鮮半島の薬草が国内に自生しているか、あるいは同じ植物であるか否かも判断できないようでは、一向に国内産の薬種へ切り替えることができない。それゆえ中国で刊行された『本草綱目』ではなく、日本版の『本草綱目』が求められていたところに、まさに小野蘭山が登場したことになる。さらに木内石亭（1724～1808）や木村兼葭堂（1736～1802）、あるいは多方面で活躍した平賀源内（1728～1780）もほぼ同時期に誕生し、同じころに本草家として活躍する。すなわち本草学は、自然に関する総合的な学問であるといってよく、彼らの考察や著作が近代において医学、薬学のみならず、動物学、植物学、鉱物学などの様々な学問の礎にあることを指摘しておきたい。筆者の専門とする考古学も、「石」の中に人工物を見出した点において、石亭の研究成果がその源流にあるといってよい。もっと具体的に言えば、石亭が命名した「車輪石」や「鋤形石」という名称が、今日においても学術用語として使用されていることを例示しておく。

さらに平賀源内などが主催した「物産会」の活動は、「収集する」「命名する」「分類する」「展観する」という要素から成り立っており、この内容は博物館活動の源流でもある。このように考えれば、本草学の学統において小野蘭山の系譜につながる田中芳男が、第2代の東京国立博物館館長に就任していることも理解できよう。

以上のように小野蘭山について述べてきたが、蘭山の背景を知ることによって、彼が手元に置いていたという「小野蘭山愛蔵石類」の重要性が理解できるものである。

### （3）「小野蘭山愛蔵石類」の概要

本項では杏雨書屋が所蔵する「小野蘭山愛蔵石類」の概要をまとめておきたい。この資料が杏雨書屋に所蔵された時期は、1935（昭和10）年であるとの報告がある（小曾戸 2015）。先述したように関東大震災を機に武田長兵衛が医学、本草学の古典籍収集を開始してからおよそ10年後ということになる。もっとも早くこの「小野蘭山愛蔵石類」を世に知らしめた報告としては、1940年に藤野勝彌によって「小野蘭山遺愛の神農像 其の他」と題した小文がある（藤野1940）。この中では蘭山が常に自分のそばに置いていたものとして神農像を紹介しているが、その報告の最後に「この外、杏雨書屋には蘭山が採集したものとして小野家に傳はつてゐた石薬標本の一部が所蔵されてゐる。」との記述がある。その後はこの「小野蘭山愛蔵石類」は広く知られることなく杏雨書屋に保存されていたようであり、先述した大沢も特にこの資料については触れていない。その後、この資料が公開されたものとしては、2002（平成14）年に開催された「第39回杏雨書屋特別展示会 小野衆芳軒の旧蔵書籍類」という展示会において展観された。この展示において宮下三郎<sup>21</sup>により、1935年にこの「小野衆芳軒の旧蔵書籍類」が杏雨書屋によって購入された際の「帳簿」が公開された（宮下2002）。この帳簿によれば購入時には「参箱」あり「石品」として記載されている。この「帳簿」には、藤野が紹介した神農像についても「小野家旧蔵神農像 壹体」として記載がある。すなわち今回紹介する考古資料は、この時に杏雨書屋に入ったものと考えてまちがいない。「帳簿」に記載されている古典籍類には購入時の価格が明記されているが、「神農像」「石品」とも金額の記載は見られない。



その後は2009（平成21）年に杏雨書屋の開館30周年記念で刊行された『杏雨書屋図録』において、図版と解説文が掲載された（武田科学振興財団・杏雨書屋2009）。この図録には現在の所蔵名と所蔵番号が「小野蘭山愛蔵石類」二箱（洗二一）として掲載されている。その解説文には、この資料が小野家の旧蔵品であり、蘭山の知識が本草学を超えて博物学へと広がりを持つものとして紹介されている。

改めてこの「小野蘭山愛蔵石類」を見ていくこととするが、この資料は今回の主な調査対象とした「勾玉・石器類」を収納する箱（図版1-1・2、図版2）（以下、「考古箱」と呼称する。）と、「鉱物・化石類」を収納する箱（図版1-3）（以下、「鉱物箱」と呼称する。）の2箱からなる。この「考古箱」と「鉱物箱」の形状は異なっており、来歴は異なる可能性がある。

「考古箱」は横60cm、縦28.5cm、高さ8.0cmの杉材の箱に、それより一回り小さい杉板を落とし込むように収納し、25品を紙縫りによって板に結び付けている<sup>3)</sup>。この「考古箱」には蓋が伴っており、「小野蘭山愛蔵石類」と墨書してある。

一方、「鉱物箱」は横45.5cm、縦24.5cm、高さ4.5cmの黒漆の塗り箱であり、箱を縦3列、横5列に区切っている。箱自体はかなり劣化しており、短辺の一つは欠落している。さらに黒漆もかなり剥落しており、長い年月を過ごしてきたことが感じられる。各マスにそれぞれの鉱物類が納められており、解説紙片が各マスの側面に添付されていたことがわかる。さらに英字も記されている解説紙片が各マスに付属しているが、紙質から判断して箱に貼付してある紙片とは時期差があると考えられる。

この箱の相違点について考えていきたいが、「鉱物箱」は江戸時代の収集家がコレクションを収納した際に用いた箱の形状とよく似ている。例えば大阪市立自然史博物館に保管されている「木村兼葭堂貝石標本」が納められている収納箱も漆が塗られた重箱であり、マス目に区切られている中に標本を納めていく方法も同様である。さらに「鉱物箱」の各マスに添付された紙片には、「禹餘糧」「紫石英」など『本草綱目啓蒙』に記載されたものと同じ「品名」が記載されている。すなわち、この貼付された紙片が江戸時代のものの可能性が高いことから、この状態で伝世してきたものと判断したい。

一方の「考古箱」は、資料を紙縫りによって板材に括り付けている。この状態で江戸時代から伝来しているかといえ、ある時期において勾玉は段ボール紙に貼り付けて保存されていたことが、箱の中に残されていた台紙の存在から予測できる（写真1）。さらに先に指摘した「帳簿」には「石品」・「参箱」と記載があることから、杏雨書屋に入った時には、現在と異なる状況で収納

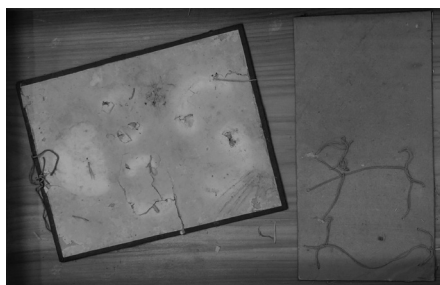


写真1 「考古箱」内の台紙

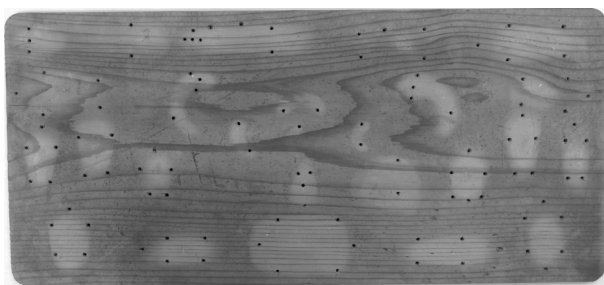


写真2 「考古箱」内の台板

されていた可能性もある。このように若干の変動があったことは確かであるが、杉板に括り付けられていた品物の数は、その痕跡から判断する限り増減はなく（写真2）、この数量と内容で伝来してきたと思われる。

さらにこの「考古箱」が小野蘭山の手元にあったことは、箱蓋に押印された「衆芳軒蔵書記」の印影があることから間違いないと判断できる。蓋の表面には和紙に捺印したものを貼付しており、蓋の裏面には直に蔵書印が押印してある（写真3）。厳密に言えばこの蔵書印がいつ押印されたか、蘭山自身が押印したものかを明らかにすることはできない。しかしながら杏雨書屋が所蔵する蘭山の自筆稿本等の書籍類にも、同じ印影を確認することができることから（武田科学振興財団・杏雨書屋2011）、この「考古箱」が蘭山の周辺にあったことは認めても良いであろう。すなわちこの「考古箱」は、蘭山の研究拠点であった「衆芳軒」に納められていたものであって、江戸時代に収集されて今日まで伝えられた資料として間違いないものと判断したい。



写真3 「衆芳軒蔵書記」印影

いずれにせよ、今回調査を行った「考古箱」に納められた資料を、考古学的な観点から観察したことはこれまでになかったことは確かであり、次章において勾玉と石器類の個別の調査結果を記述していく。

（徳田）

### 3 「小野蘭山愛蔵石類」の観察所見

本章では、今回実測図を作成した25点について、その観察所見を見述していく。24点を勾玉と石器類に大別し、その他1点と併せて紹介する。

#### （1）勾玉類

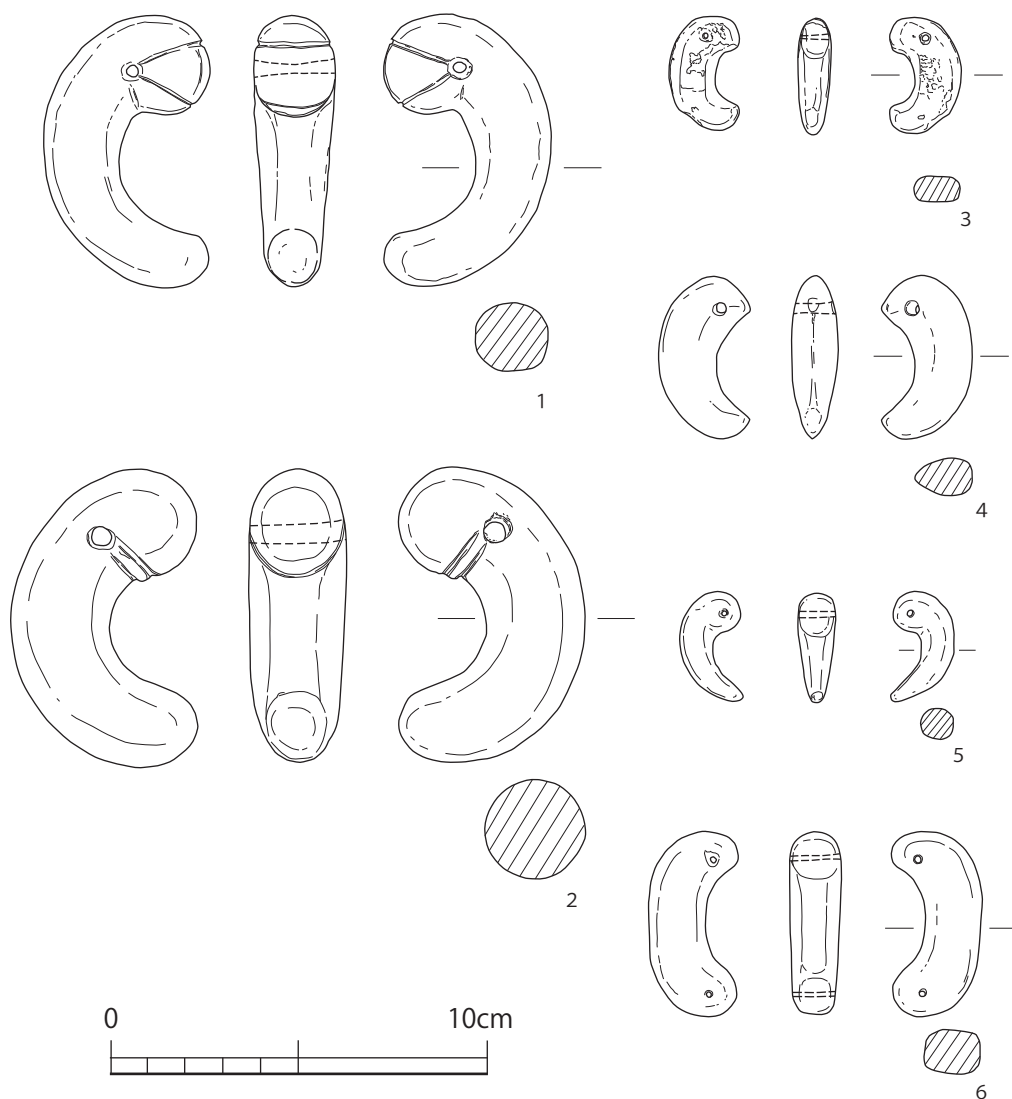
25点のうち6点が、いわゆる勾玉として分類できる。以下、各個体の真贋を含めて石材や形状などの特徴を観察していく。

NO.1（挿図1-1・図版3-1） 全長7.07cm、頭部幅2.17cmを測る、大形の勾玉である。頭部には2条の沈線が刻まれており、いわゆる丁子頭の勾玉となっている。全体に丁寧な研磨が施されており、腹部、背部とも丸みを帯び、胴部断面はほぼ円形を示す。頭部には直径6mm程の孔が穿たれており、孔の直径は中心部に向かって小さくなっていることから両面から穿孔されたものと考えられる。この孔から延びる沈線はやや波打つように刻まれている。頸部には成形時の削り痕がわずかに認められる。石材はネフライト（軟玉）と考えられ、表面には気泡状の凹凸をわずかに観察することができる。色調は黒色から暗緑色を呈し、わずかに灰色がまだらに認められる。重量は、78.5gである。

以上のような観察結果からするとこの勾玉は古墳時代の遺物ではなく、いわゆる琉球勾玉に属するものと考えられる。琉球勾玉については後述するが大きさ、石材、施文方法の諸特徴からも

その要素を満たしている。さらに孔の中を観察すると、土の付着は全く認めることができず、このことから土中からの出土品ではなく、この点も他の琉球勾玉の状況と一致する。

NO.2（挿図1－2・図版3－2） 本個体は全長7.8cm、頭部最大幅2.5cmを測る、大形の勾玉である。頭部と尾部の湾曲具合が対称形を示し、全体に「C」字のような形状を呈する。研磨は全体に丁寧であり、胴部の断面は円形となる。色調は光沢のない淡い黒色を呈し、重さは110.81gを測る。石材は明瞭ではないが、軟質の粘板岩のようであり、少なくとも古墳時代の勾玉に使用されるような石材ではない。頭部には直径6mmほどの孔が穿たれており、やや斜めに貫通している。また、表面には人為的に何かを塗布したような痕跡も観察できる。



挿図1 杏雨書院所蔵の小野蘭山愛蔵石類 勾玉

本個体の特徴は孔の下側、すなわち勾玉の頸部に2条の沈線が施されている点にある。いわゆる丁子形の勾玉は孔から上方に沈線が施されるものであって、本個体のように下向きに沈線を施した例は知られていない。このような特徴、特に大きさや石材から考えて、本個体は少なくとも古墳時代の所産とは考えられない。それでは大きさから判断してNo.1と同様の琉球勾玉かといえば、大きさとしてはありうるものであるが、沈線の形状と石材から判断するとその特徴は備えていない。よって本個体は、勾玉を模造した模作品として位置付けておきたい。

NO.3（挿図1-3・図版3-3）本個体は側面が平らであり、全体に扁平な形状を示すことが特徴である。全長は2.92cm、頭部最大厚は0.96cm、重量5.33gを測る。色調は暗茶褐色から一部は橙色を呈し、石材は質のよくない瑪瑙と判断した。頭部には直径1mmほどの孔が、ほぼまっすぐ穿たれている。全体に研磨は不十分であり、側面は石材本来（原石）の面を残している。すなわち限られた原石からなるべく大きく勾玉の形状を作り出そうとしたために、側面の研磨が不十分であっても、勾玉としての大きさを優先したように思われる。結果的に全体は扁平となり、断面形は隅丸方形を呈する。

さて本品の真贋であるが、使用されている石材と頭部に穿たれた小孔の形状と穿孔方法から判断して、古墳時代に製作された勾玉である可能性を考慮しておきたい。換言すれば後世に模造された勾玉であれば、むしろもっと研磨は丁寧に施されており、本品のような「出来の悪い」勾玉は贋作としては通用しないと考える。石材も質は悪いが瑪瑙を使用し、できるだけ大きな勾玉を作り出そうとしている製作意図から判断して、古墳時代に使用された勾玉である可能性が高いものと判断しておく。

NO.4（挿図1-4・図版3-4）全長4.22cm、最大幅1.22cm、重量14.0gを測る勾玉である。頭部と尾部の先端がややとがるように研磨されていることと、腹部も丸みを帯びずに、断面が尖るような形状を呈する。頭部には3mmほどの孔が穿たれているが、まっすぐではなくやや斜めに貫通している。石材は軟質の玉のような石材であるが、古墳時代の勾玉には用いられていない石材である。色調は、黄茶灰色を呈する。

全体に丁寧な研磨は施されているものの、形状、使用されている石材から考えて古墳時代の所産とは考え難く、後世に製作された勾玉の模作品としておきたい。

NO.5（挿図1-5・図版3-5）本個体は、尾部がやや尖った形状を示す勾玉である。全長は2.92cm、頭部最大幅は0.96cm、重量5.33gを測る。頭部には2mm弱の孔が穿たれており、片面穿孔と思われる。色調は淡い黒色を呈し、石材は滑石のような石材であるが、古墳時代の勾玉には使用されていないものである。

以上の諸特徴から、形状としては古墳時代所産の勾玉として違和感はないものの、石材などから判断して、後世に製作された勾玉の模作品としておきたい。

NO.6（挿図1-6・図版3-6）本個体は両端に穿孔が認められることから、勾玉に分類することはできないが、今回の紹介では便宜上勾玉として取り扱っていく。全長は4.85cmを測り、最大厚は1.20cmである。頭部（図上の）がやや厚く、尾部に行くにつれやや細くなる。両端に直径2mmほどの孔が穿たれており、両方ともほぼまっすぐに穿孔されている。断面は胴部と背部がやや丸みを帯びるものの扁平であり、よって断面は隅丸の長方形を呈する。石材は淡い黒色を呈する軟玉であり（重量19.35g）、琉球勾玉（NO.1）の石材に似る。

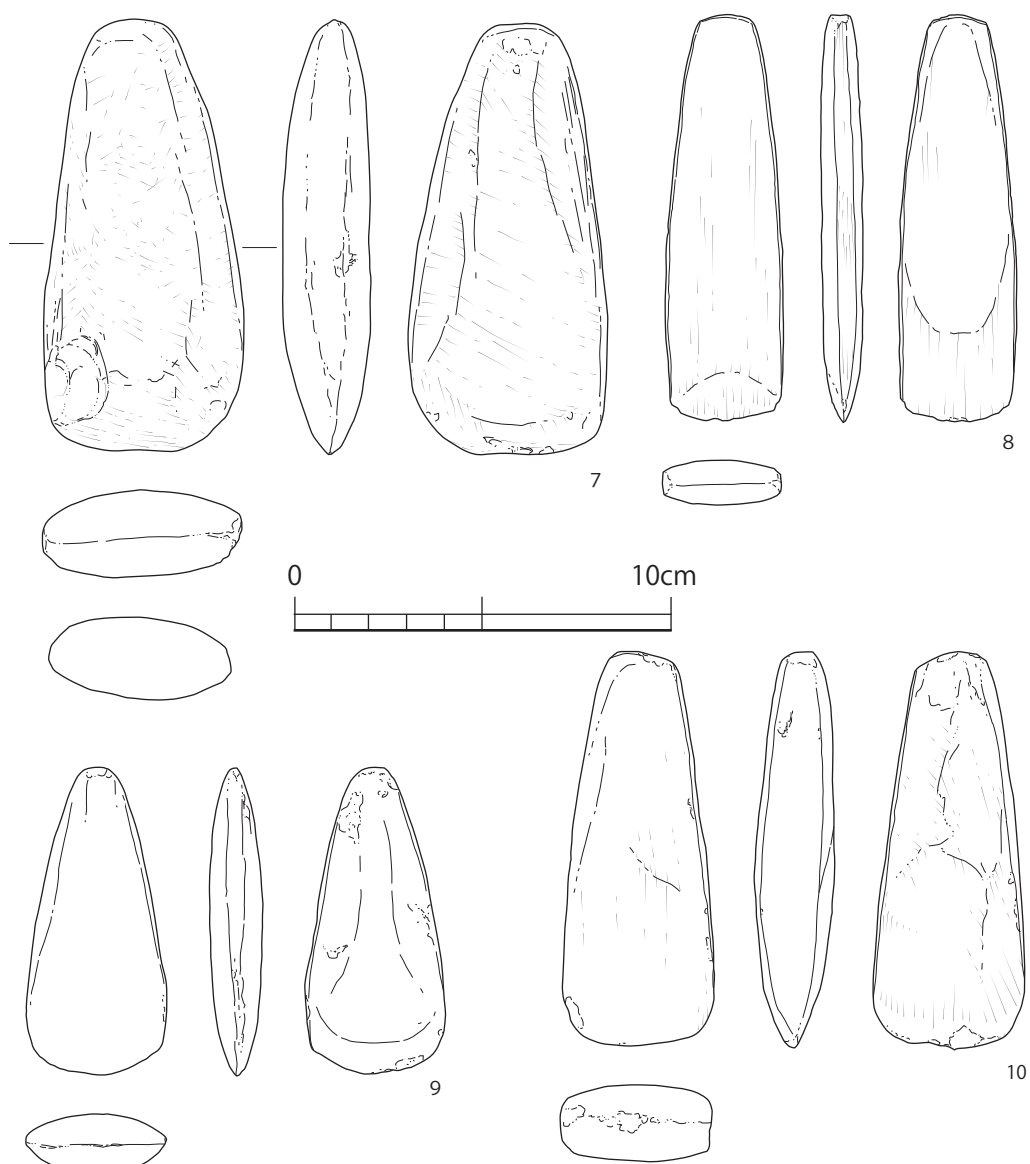


本品は、両端に穿孔があることから勾玉とすることはできないが、いずれにせよ古墳時代の所産とは考えられず、勾玉を模造した模作品としておく。

(徳田)

## (2) 石器類

石器類は18点あり、磨製石斧と打製石斧、磨製石刀形石製品に分けられるが、縄文時代弥生時代の考古学的年代の所産とみなせるものと江戸時代にそれを模作したものがある。以下、各個体の石材や形状などの特徴を観察し、製作時期などを検討していく。なお、石材の判定は、目視による経験的な分類にとどまり、岩石学的な分析は行っていない。

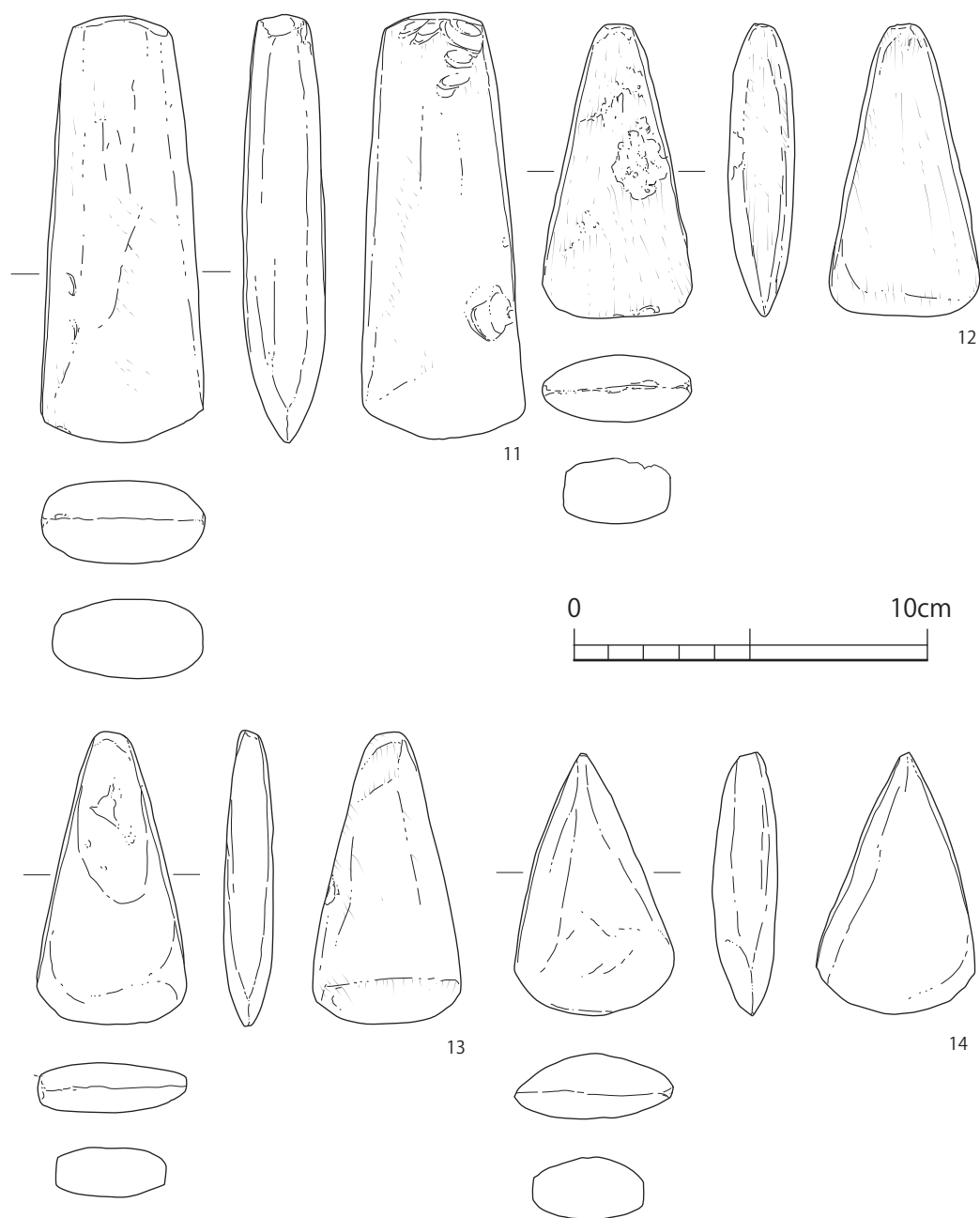


挿図2 杏雨書院所蔵の小野蘭山愛蔵石類 磨製石斧①

## ア 磨製石斧

考古学的年代、縄文時代、弥生時代の所産と見なせるものは5点である。

NO.7 (挿図2-7・図版3-7) 輝石小斑晶の見える黒色蛇紋岩製、全長11.4cm、幅5.3cm、厚さ2.3cm、重さ211.6gの磨製石斧である。成形の最終段階では研磨は横主体で、両側面は横方向の研磨で丸く整形されている点は、定角式石斧の範疇からやや外れる。刃部左辺に整形後の



挿図3 杏雨書院所蔵の小野蘭山愛蔵石類 磨製石斧②

ダメージ剥離がある。右刃部に傾きがあつて、使用ダメージの刃部再生が行われて傾いた可能性がある。表とした面に観察される研磨擦痕底に、部分的ではあるが成分不明の黒灰色付着物が残る。人為的な着色である可能性と、燈火の油煙煤や埃の経年付着の可能性が考えられる。縄文時代の所産であろう。

NO.8（挿図2-8・図版3-8） 溶結凝灰岩または風化流紋岩の白色化した石材製、全長10.7cm、幅3.0cm、厚1.0cm、重さ61.78gの定角式磨製石斧である。器面全面に黄鉄錆状の膠着がある。細身長身であることと、かなり風化が進行しているが、本来は玉質であった可能性は、注意される。縄文時代の所産と見なしてよい。

NO.9（挿図2-9・図版3-9） 緑色蛇紋岩またはネフライト製、全長8.1cm、幅3.7cm、厚さ1.4cm、重さ69.16gの定角式磨製石斧である。石材が玉質で、やや撥形で薄く作られている。線状に成分不明の黒灰色付着物が残っていて、汚れの拭き取り痕、または「古色」が付けられていた可能性があつて、NO.2と同時に科学的分析をする必要が考慮される。縄文時代の所産であろう。

NO.10（挿図2-10・図版3-10） 暗灰色安山岩または蛇紋岩製、全長10.5cm、幅4.0cm、厚さ2.1cm、重さ144.42gの定角式石斧である。刃部に使用痕と思われるダメージがある。両側面は広く断面が三味線胴形を呈する。基部面には打痕、側面には若干の擦過痕跡があつて、縄文時代の所産とみられる。全面に成分不明の黒灰色付着物が残っている。

NO.11（挿図3-11・図版3-11） 暗灰色泥岩と思われる石材製、全長12.0cm、幅4.5cm、厚さ2.3cm、重さ234.97gの蛤刃磨製石斧である。基部周辺や身部に荒成形成離や敲打痕が残る。成分不明の黒灰色付着物が残っている。弥生時代の所産であろう。

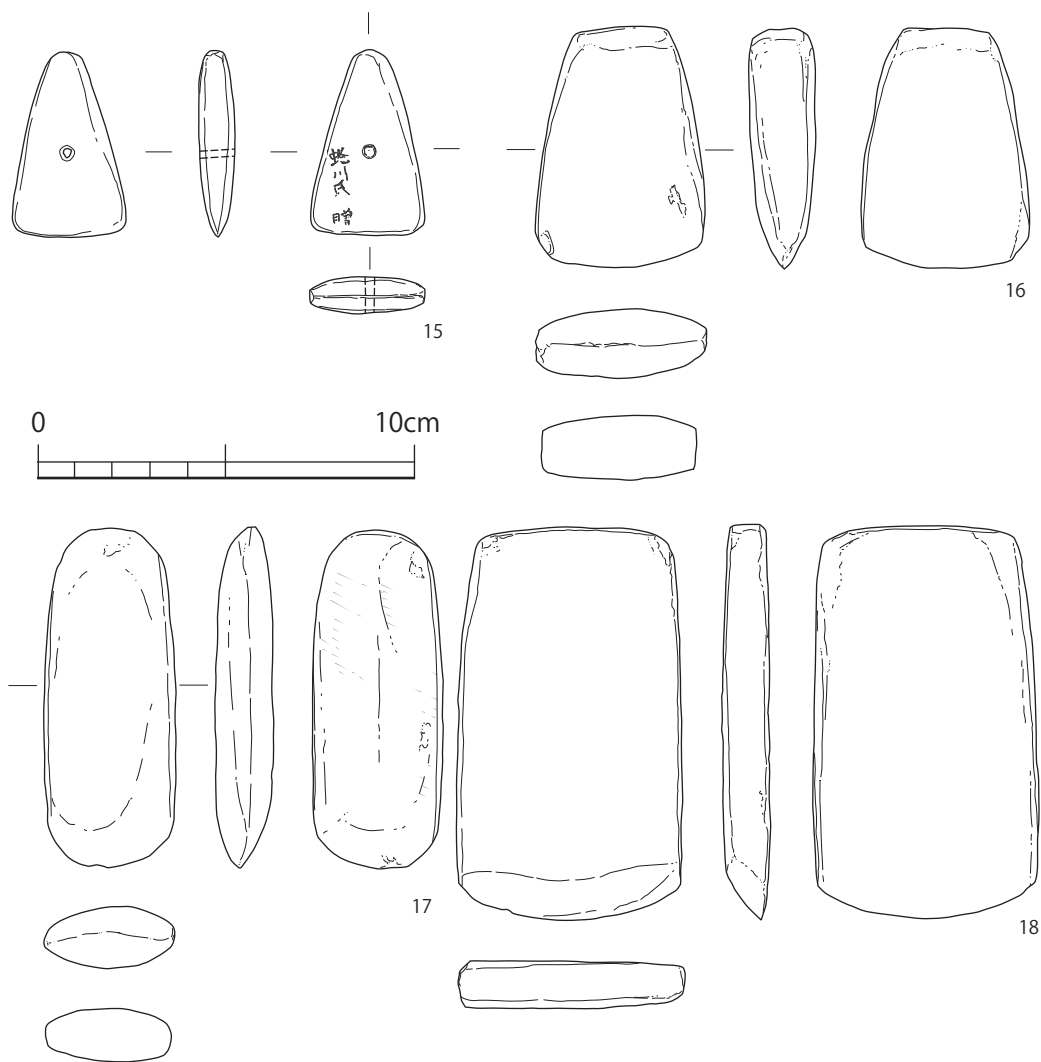
江戸時代に模作された可能性があるものは以下の10点である。

NO.12（挿図3-12・図版3-12） 灰色蛇紋岩または安山岩製、全長8.3cm、幅4.2cm、厚さ1.8cm、重さ88.44gの撥形定角式磨製石斧である。ほぼダメージのない状態で、極端な撥形で両側面は丸くて基部端面は狭い。縄文時代の所産としては希な形状であり、江戸時代に製作された神代石（模作品）である可能性がある。成分不明の黒灰色付着物が残る。

NO.13（挿図3-13・図版3-13） 黒色安山岩製、全長8.2cm、幅4.2cm、厚さ1.4cm、重さ74.89gの撥形定角式磨製石斧である。ほぼダメージのない状態で、極端な撥形で両側面は丸くて基部端面は狭い。縄文時代の所産としては希な形状であり、江戸時代に製作された神代石（模作品）である可能性がある。成分不明の黒灰色付着物が残る。

NO.14（挿図3-14・図版3-14） 緑縞のある蛇紋岩製、全長7.3cm、幅4.5cm、厚さ1.9cm、重さ83.25gの撥形定角式磨製石斧である。ほぼダメージのない状態で、極端な撥形で両側面は丸くて基部端面は狭い。縄文時代の磨製石斧としては希な形状であり、江戸時代に製作された神代石（模作品）であると思われる。成分不明の黒灰色付着物と鉄錆状の褐色付着物が部分的に残る。

NO.15（挿図4-15・図版3-15） 緑色玉質のネフライト製、全長4.8cm、幅3.0cm、厚さ0.9cm、重さ20.90gの撥形定角式磨製石斧である。中央に穿孔があるが、内部に木質の充填物があつて、もとは閉塞されていたらしい（写真4）。木質部に石器と同色の彩色が残っていて、一見して違和感がないようにされていたことが観察できる。裏面には、「蜷川氏□贈」と読める朱書きがある（写真5）。ほぼダメージのない状態で、極端な撥形で両側面は丸くて基部端面は狭い。



挿図4 杏雨書屋所蔵の小野蘭山愛蔵石類 磨製石斧③



写真4 NO.15の穿孔



写真5 NO.15 「蜷川氏 贈」朱書き



縄文時代の所産としては希な形状であり、また穿孔もあることから、江戸時代に製作された神代石（模作品）であると思われる。

NO.16（挿図4-16・図版3-16） 器面には流紋が観察できる流紋岩質凝灰岩製、全長6.3cm、幅4.5cm、厚さ1.8cm、重さ67.65gの定角式磨製石斧である。最大厚部分が石斧基部にあって、一般的な装着に困難がある形状であることから、不自然な形状をしている。破損石斧の再生の可能性も考えられるが、刃部形状と三味線胴形を維持していることに違和感がある。特徴的な石材であるが、これにも成分不明の黒灰色付着物があって、刷毛筋が洗浄痕でないなら、人為的に「古色」をつけて表面を覆っていたとも観察できる。縄文時代ではなく、江戸時代に製作された神代石（模作品）であると思われる。

NO.17（挿図4-17・図版4-17） 縞状緑色蛇紋岩製で、もと朱書きがあった部分が褐色に変色している。全長9.0cm、幅4.4cm、厚さ1.5cm、重さ91.48gの磨製石斧である。全面が丁寧な研磨されて光沢があり、研磨痕がほとんど観察できない。刃部と基部の幅がほぼ同じで基部端部も丸まっていることから装着方法が想定できず、また両側面が丸まって成形されていることから、利器としての形状ではないと見なせる。縄文時代ではなく、江戸時代に製作された神代石（模作品）であると思われる。

NO.18（挿図4-18・図版4-18） 黒暗色蛇紋岩または安山岩製で黒色斑晶が認められる。全長10.4cm、幅5.9cm、厚さ1.2cm、重さ181.44gの磨製扁平片刃石斧である。石材に大きな斑晶があって、研磨による条痕を残さない。部分的ではあるが成分不明の黒灰色付着物が残る。大陸の玉斧や弥生時代扁平片刃石斧を思わせる形状をしているが、材質や製作方法に疑問が残る。江戸時代に製作された神代石（模作品）であると思われる。

NO.19（挿図5-19・図版4-19） 灰色蛇紋岩製、全長7.8cm、幅4.9cm、厚2.0cm、重さ134.42gの磨製石斧である。短軀で丁寧な研磨が施されて、成形痕は観察できない。基部と両側面は丸く、刃部も蛤刃状を呈すること、縦横装着方法が判別できない。部分的に成分不明の黒灰色付着物が残っていて人為的に「古色」をつけて表面を覆っていたとも観察できることから、縄文時代ではなく、江戸時代に製作された神代石（模作品）であると思われる。

NO.20（挿図5-20・図版4-20） 緑色の玉質蛇紋岩またはネフライト製、全長5.6cm、幅4.25cm、厚さ1.25cm、重さ52.83gの短軀な定角式片刃磨製石斧である。丁寧な研磨を施して成形痕を残さない。特異な形状から、江戸時代に製作された神代石（模作品）である可能性がある。

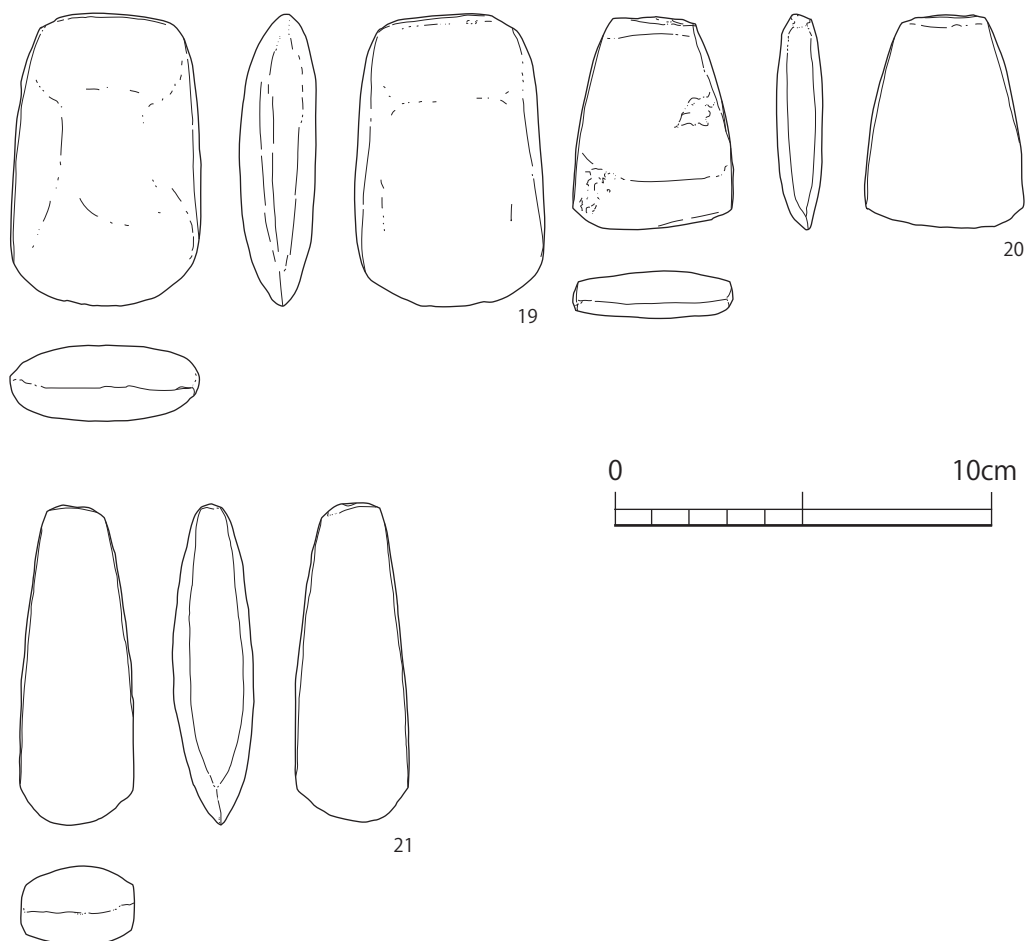
NO.21（挿図5-21・図版4-21） 灰青色の蛇紋岩またはネフライト製、全長8.4cm、3.0cm、2.1cm、94.68gの定角式磨製石斧である。整った定角石斧の形状をしているが、器厚で蛤刃であることが縄文時代磨製石斧の範型から逸脱しており、江戸時代に製作された神代石（模作品）であると思われる。

（山口）

#### イ 打製石斧

打製石斧は2点あるが、打製石器は模作が困難なものであるもので、いずれも考古学的年代の所産であると思なせる。

NO.22（挿図6-22・図版4-22） 暗灰色の頁岩製、全長15.8cm、幅3.8cm、厚さ1.3cm、重さ97.44gの打製石斧である。長短冊形をしていて、農耕用具石鍬の機能が推定される。頁岩の大



挿図5 杏雨書屋所蔵の小野蘭山愛蔵石類 磨製石斧④

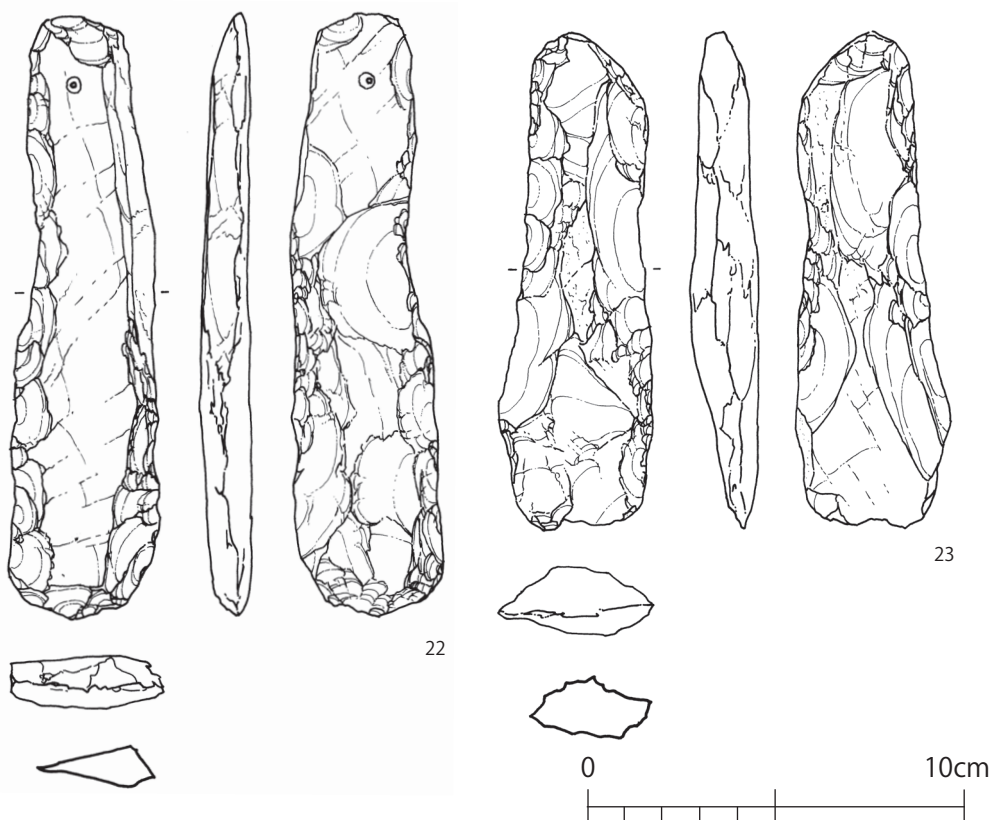
剥片の側面を打製成形するが、機能部には使用痕はない。縄文時代の所産であろう。後世、身部上部に両面から錐状工具で穿孔を施して、懸垂できるように改造されている。あるいは敲打により音色を楽しむように加工されたものかと思われる。上部に朱色顔料の付着があって、朱書きが消された可能性がある。

NO.23 (挿図6-23・図版4-23) 風化の進んだ暗灰色の頁岩製、全長13.1cm、幅4.0cm、厚さ1.8cm、重さ85.5gの打製石斧である。長短冊形をしていて、農耕用具石鋤の機能が推定される。頁岩の大剥片の側面を打製成形するが、先端部表面に大剥離面が未調整で残り、機能部整形は未完成である。縄文時代の所産であろう。

(山口)

#### ウ 磨製石刀形石製品

NO.24 (挿図7-24・図版4-24) 全長14.9cm、重量120.88gを測る、泥岩製の磨製石刀形石製品である。柄部から刃部にかけてほぼ直線的な形態を呈するが、中央部がややくびれ、刃部が



挿図6 杏雨書院所蔵の小野蘭山愛蔵石類 打製石斧

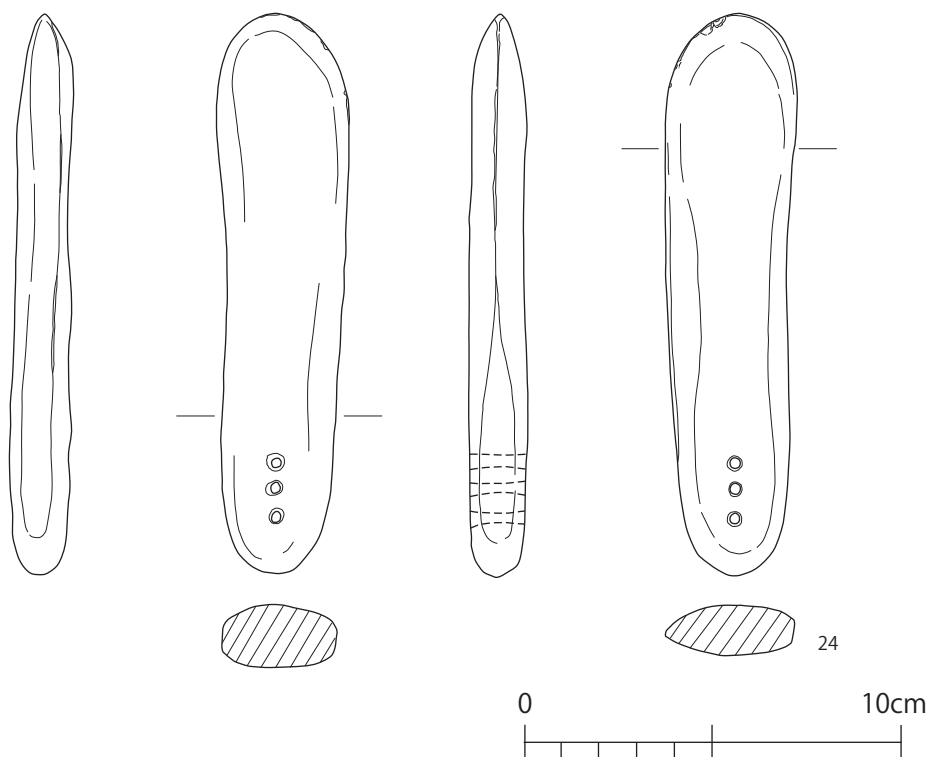
若干幅広となる。柄部の最大幅は3.0cm、厚さ1.65cm、刃部の最大幅は3.4cm、厚さ1.45cmを測る。刃部の断面形態は楕円形で、片方のみが鋭角な片刃となる。柄部には縦位に三か所、径3.5mm程の穿孔が認められ、孔内に一部白色の付着物が認められる。片刃の石刀を志向するが、刃部が明瞭ではなく、全体的に陵が緩く扁平な形態で柄部には複数の穿孔がみられることなどから、江戸時代に製作された神代石（模作品）の可能性はある。

（山下）

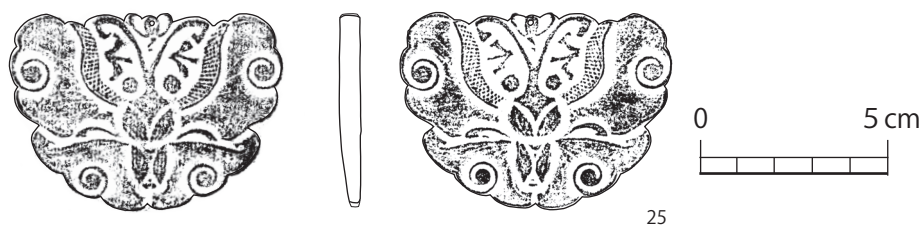
### （3）その他

NO.25（挿図8-25・図版4-25） 本個体は表裏に蝶の文様が刻まれており、仮に「蝶文様飾板」と呼称しておく。最大幅は7.21cmを測り、最大長は5.21cmである。石材は灰色から白色を呈す玉のような石材が用いられている。表面は下方に行くにつれて薄くなるのに対し、裏面はほぼ平らである。表裏には全く同じ蝶の文様が線彫りされている。蝶の形状は基本的に左右対称であるが、触角部分の表現が一部対称とはなっていない。蝶の触角と触角の間に直径1mmほどの小さな孔が穿たれており、本品は懸垂の状況で用いられた可能性が高いものと思われる。

本品の製作年代、その用途については管見においては類例を知らない。単独で用いられたものか複数枚で構成されるかもわからない。いずれにせよわが国で製作され使用されたというよりは、



挿図7 杏雨書屋所蔵の小野蘭山愛蔵石類 磨製石刀形石製品



挿図8 杏雨書屋所蔵の小野蘭山愛蔵石類 その他

蝶の文様が使用されていることとその石材から判断して、中国大陆で製作された可能性を考えておきたい。但し、わが国にも家紋等に「蝶文様」が存在しているので、「蝶」をモチーフにした製品（軒丸瓦の瓦当面文様等）が皆無ではないことは注意する必要がある。

（徳田）

#### 4 「小野蘭山愛蔵石類」の考察

これまで観察してきた小野蘭山愛蔵石類について、これまでの結果を踏まえていくつかの考察を記述しておきたい。



## (1)「琉球勾玉」について

今回の調査で紹介した勾玉（NO.1）は、琉球勾玉であると判断した。考察の一つとして、この琉球勾玉の問題を取り上げる。

関西大学博物館には、5点の琉球勾玉が所蔵されている。筆者は以前にこの琉球勾玉を紹介し、その出自を検討したことがある（徳田 2015）。琉球勾玉とは琉球王国の神女（ノロ）を象徴する装身具として、簪とともに身を飾ったものである。現在でも神女を世襲していた家には勾玉と簪が残されているところがあり、これらを箱に入れた状態で安置し拝礼する習慣を残している。琉球の勾玉の出自についてはいまだ不明の点が多いが、関西大学博物館が所蔵するような全長7cmを超え、丁子頭となるように沈線が施されているものを「琉球勾玉」として考察していきたい。

今回紹介した勾玉（NO.1）は、全長7.07cmを測り、頭部に2条の沈線が刻まれている典型的な琉球勾玉であるといってよい。この琉球勾玉の重要性はその大きさや形状ではなく、江戸時代に本土に流入したことを証明する存在として重要である。すなわち関西大学博物館が所蔵する琉球勾玉、さらに現在東京国立博物館に収蔵されているものは明治になって、琉球が「琉球処分」という混乱した状況の中で流出し、本土にもたらされたものと考えられる。しかるに今回の小野蘭山資料に含まれていた琉球勾玉は、江戸時代以来伝来したものであって、18世紀の後半に持ち込まれた可能性が高いと考えられる。そこで江戸時代における勾玉研究を振り返りながら、今回の琉球勾玉の位置づけを考えたい。

江戸時代の勾玉研究は、物産学の一派として位置付けられる弄石家によるものと、国学の観点から取り上げたものがある。前者の代表が木内石亭による『曲玉問答』（1783（天明3）年刊）であり、後者は谷川士清による『勾玉考』（1774（安永3）年刊）である。『曲玉問答』では勾玉についてさまざまな質問に石亭が応答する形で、彼の勾玉に対する研究成果を述べている。よってまずはこの書物に記述された、「琉球勾玉」に関する部分を抜粋してみたい。

問「或人云、琉球ニテ神ヲ祭ル婦人、神拝ノ時首ニ掛物アリ。種々ノ美玉ヲ連タル物アリ。其両端ニ曲玉アリ吾視リ是ヲ見タリ。茲ヲ以テ見ル時ハ琉球ノ製作ニテ偶日本ヘ渡タルモノ歟」

答「答云、琉球ニテ是ヲノロクメト云琉球ノ詞ナリ、又蝦夷ニテ大将分ノモノ建玉ヲ頭ニ掛テ飾トシ礼式トス。是ヲシトキト云蝦夷ノ詞ナリ、其両端ニモ曲玉アリ。予按ニ上古ハ和漢一統ニ玉ヲ以テ身ヲ飾ル。時移リ代変リテ我朝其式絶タリ。琉球蝦夷ノ邊鄙ニハ古實ドモ残レリト見ユ・・・（後略）」

この問答の内容から、18世紀当時の「琉球勾玉」の認識を知ることができるが、琉球の言葉で「ノロクメ」と呼ばれる女性司祭が首に掛けて使用するものという正しい理解が石亭の元に伝えられていることがわかる。石亭は本土で流行していた勾玉が辺境の地である琉球と蝦夷に残存したと考えたようである。現在は古墳時代の勾玉と琉球勾玉に直接の関係性は見いだせないという見解が一般的であるが、石亭がこのような記述ができるということは、彼の元にはかなり豊富な琉球の情報が届いていたことの証拠であろう。この時期に琉球の物産に関する情報が本土に届いていたことは、田村元雄（藍水）が1770（明和7）年に『琉球産物誌』が著されていることから窺い知ることができる。

さらには、石亭が琉球勾玉と思われる巨大な勾玉を所有していたことも明らかになっている。

それは谷川の『勾玉考』において、「江州山田浦石亭之所蔵則有其大如小兒腕」と記述していることである。「子供の腕」ほどある勾玉とは何かということになるが、『曲玉問答』の巻末には「勢州谷川先生著述勾玉考ニ江州石亭ノ蔵スル物ハ小兒ノ腕ノ如ト書レタルハ是ナリ」と記した図が掲載されている。ここに描かれている勾玉は頭部に沈線が刻まれていないため厳密には琉球勾玉とは言えないが、「琉球勾玉」を想定させる大きさであることはまちがいない。

このように18世紀の後半、すなわち小野蘭山や木内石亭・木村兼葭堂・平賀源内等が活躍した時代に、情報だけでなく実際に琉球から文物が、それも琉球勾玉が到来していることを証明するものとして、この「小野蘭山愛蔵石類」に収蔵されていた琉球勾玉を位置づけておきたい。前稿において琉球勾玉の出自について、この18世紀後半の本土において勾玉研究が盛んになっていた時期に、この大きさと丁子頭という形状を生み出す背景があるのではないかと考えた（徳田2015）。その根拠としてこれまでに筆者が観察してきた典型的な琉球勾玉は土中からの発掘されたものは存在せず、頭部に穿たれた孔の中を観察しても土が付着しているものは見つからなかった。すなわちすべてが地上において伝世してきたものであり、その製作年代がさほど古くないことを物語る。さらに琉球処分頃に多量に流出した背景を考えれば、その当時それほど珍品であったものではなく、それなりの数量が存在していたと考えられる。今回、実際に18世紀にさかのぼって琉球勾玉そのものが本草家のもっとも中心の人物といってよい小野蘭山の手元に収蔵されていたことは、この時期に活躍した木内石亭を代表とする弄石家や、様々な文物を収蔵していた木村兼葭堂、さらには彼らの師匠である田村元雄（藍水）らと琉球との交流を物語る物的証拠として重要な意味を持つものと考えられる。

（徳田）

## （2）「石斧」の真贋について

小野蘭山愛蔵石類に含まれる石器類については、先史時代考古資料コレクションとして見ると、はっきりした特徴がある。いずれもノーダメージの完品ばかりであること、石鏃や石槍などの剥片石器を含まないことである。このことは、江戸時代、遺跡地を踏査、遺物採集を行って得られる資料が、コレクション化される際には激しく選択されたことを示している。そのフィルターは、当時共有されていた「神代石」という概念であったことは間違いない。その概念にそぐわない実物資料は排除され、実物で得られなかった神代石は、その概念に合わせて模作されたものが加えられたのだろう。15点ある磨製石斧は、いずれも完品である。玉質や光沢が生じるほど丁寧に研磨された「完璧」完形の磨製石斧は、勾玉と同様に「神代石」のイメージに合致していたに違いない。

15点の磨製石斧は、そのうちの5点を考古学的年代の所産、10点を江戸時代の模作と判別した。神代石として両者に優劣があるかについては、模作の正確さは問わないことは明らかであり、一方審美的に記述するのは難しく、両者に差異はないと考える。

磨製石斧は、最終工程が研磨によって成形が完成することから、製作技法の相違の判別が困難となって、それだけを根拠として贋作や模作を判別することは難しい。江戸時代模作と縄文時代弥生時代の磨製石斧に、製作技術上の差異はほとんどないことは、小野蘭山愛蔵石類の観察からも明らかとなった。結果として、考古学的年代の所産として、本来あるべき機能を果たす上の形状、範型との比較で判断することになる。関西大学博物館所蔵本山コレクションには、神田孝

平旧蔵の「神代石」があって、明らかな模作石器として、今回の判断の参考とした（関西大学博物館 2011）。本山コレクション中の模作磨製石斧と比較すると、小野蘭山愛蔵石類のほうが忠実な模作が行われていることも指摘したい。中国新石器時代の玉斧に類似するものが含まれていることも注意する必要があるだろう。

今回の小野蘭山愛蔵石類では、4点ある撥形のもは、考古学的年代の所産として類品がないわけではないが、出土例が希で特異な形状であることから、江戸時代模作の神代石であろうとした。1点には穿孔が施されている。ほかの磨製石斧も機能的な部分で器形がふさわしくないものを区別した。このような判別には、各時代に存在する特異例を考慮すると、その判定に一定の錯誤を含まざるをえないと思われるが、かなりの高比率で模作を含むことは間違いないと考える。

多くの磨製石斧の研磨擦痕底に成分不明の黒灰色付着物が残っていて、着色である可能性と、燈火の油煙煤や埃の経年付着の可能性が考えられた。小野蘭山の石類箱自体には、経年の汚れは認められるが、このような付着物は目視できない。このことから、収蔵環境で全体付着したのではなく、直接石器類に付着したものと考えられる。線状に成分不明の黒灰色付着物が残っているものについては、汚れの拭き取り痕、または「古色」を付ける際の刷毛目の両方の可能性が考えられる。黒灰色付着物については、科学的な鑑定が必要であろう。

黒灰色付着物が、もしも意図的な「古色」「着色」であるなら、小野蘭山愛蔵石類の縄文時代所産のものと江戸時代模作との両者に認められる現象であることになる。このことは、神代石は黒いものであるというイメージのための着色があったことを示すかもしれない。関西大学博物館蔵の神田孝平旧蔵の磨製石斧にも、黒い「着色」が刷毛で塗られたものが存在するので（写真6）、実物にも「古色」「着色」が、江戸時代に神代石と認識されたものに広く施された可能性がある<sup>4)</sup>。あるいは、黒色蛇紋岩帯石材製などの石棒や石斧が多数産出するところに倣って、模作を古色着色、黒くない実物も着色した外観なのだろうか。当否の解明を今後の課題としたい。

打製石斧については2点あるが、打製石器は模作が困難なものであるなので、いずれも考古学的年代の所産であると見なせる。

磨製石刀形石製品については、磨製石斧と同様な判断で模作であるとした。



写真6 関西大学博物館蔵本山コレクション神田孝平旧蔵の縄文時代石斧未成品

## 5 まとめ

以上今回調査した杏雨書屋が所蔵する「小野蘭山愛蔵石類」について、その結果を報告してきた。しかしながらまだまだ残された課題は少なくない。例えばNO.15に記された文字を「蜷川氏寄贈」と解釈したが、「蜷川」が誰であるかの特定には至っていない。

また、もう一つの大きな課題は「模作」をめぐる問題である。「模作」とは換言すれば「贋作」といってもよいが、関西大学博物館では江戸時代の本草学・物産学を考察する際の学術資料になりうるものとして「模作」という用語を使用している。今回の調査資料においても、勾玉も石斧においても多数の「模作」が含まれている。勾玉についていえば琉球勾玉を除けば、古墳時代資料として可能性が指摘できるものは1点であり、他は「模作」である。磨製石器については16点中、縄文時代あるいは弥生時代に属する資料は5点に留まる。よって、そのほかは「模作」ということになるが、いつ、だれが、どのようにして製作したかについては解明できていない。勾玉についていえば、よくできているものが多い。石材が古墳時代に使用されたとは考えられないことから「模作」としたものがあり、形だけを見れば古墳時代に属する勾玉の形状を忠実に模倣している。

このような「模作」が製作された背景には、石亭ら弄石家が競って「石」の収集に熱中した時期に、「奇石商」と呼ばれた人が彼らのもとにやってきて「石」を売り歩いていったことが要因として考えられる。すなわち勾玉や石斧、さらには用途が判明しないものを総称した「神代石」を含めて、この時期には商品であったことが指摘できる。当然売り物となる商品を仕入れる際に、土中から出土したものだけでは需要が賄えなければ「模作」が作られる。そしてこの「模作」が売買された結果、弄石家の手元に収蔵され、今日まで伝えられてきたことが考えられる。

このような江戸時代に作られたと考えられる「模作」が少なくないことは、関西大学博物館所蔵品を見ても確実である。それゆえ、これらの「模作」は「模作」であることに十分注意しなければならない。けして現在の「考古学資料」としては扱えない資料であることに留意することと、さらにはこのような「模作」が存在していることを考古学研究に携わる者は、再度肝に銘じておくべきである。

今回、杏雨書屋が所蔵する「小野蘭山愛蔵石類」を、詳細に調査することができた。この資料は本草学の大家である小野蘭山の手元にあったものであり、これまで分散せずに伝えられてきた価値は非常に高いものがある。今後、関西大学博物館に所蔵されている神田コレクションなど江戸時代以来の収蔵品を理解していく際に、その比較検討材料として重要な資料であることを記して結語としたい。

(徳田)

### 【註】

- 1) 今回の調査にあたっては、2022年5月18日付(受付No.2203G)にて徳田から公益財団法人武田科学振興財団杏雨書屋に「特別図書原本閲覧申請書」を送付し、5月31日付で閲覧の許可を得たものであ



る。今回の調査は2020年3月に実施に向けて計画を立案したが、その後新型コロナウイルス感染症拡大の影響もあり延期を余儀なくされていたものである。この間、同財団の百瀬祐部長、同学芸員瓢野由美子氏には調査の実施にあたって様々なご尽力を賜った。また、調査中には「小野蘭山愛蔵石類」の来歴、あるいは「蔵書印」について有益なご助言を賜った。重ねて厚く御礼申し上げる。

2) 宮下三郎教授は1930年に愛知県でお生まれになり、京都大学医学部薬学科をご卒業の後、武田薬品工業に入社された。その後、1982年4月に関西大学社会学部のご着任になり、2000年3月にご退職されている。

橋本敬造 2000 「宮下三郎教授の御退休を祝う」『関西大学社会学部紀要』第31巻 第2・3合併号 関西大学社会学部

3) 今回の調査にあたっては、武田科学振興財団杏雨書屋の運営協議会のご許可を得て、止め糸（紙縫り）を外して、閲覧・実測図作成・写真撮影などの調査を実施した。外した紙縫りはそのまま保存し、同等の新しい紙縫りにより原状復帰したものである。紙縫りを外すことをご許可いただいたことを重ねて御礼申し上げる。

4) 山口は2000年頃に関西大学博物館蔵神田孝平旧蔵の黒色蛇紋岩製の石棒について、春成秀爾氏（国立歴史民俗博物館名誉教授）から、着色されたものがあるかどうか、贋作模作の可能性があるかどうか確認すべしとの教示をいただいたことがある。

#### 【参考文献】

大沢眞澄 2010「小野蘭山と鉱物——『本草綱目啓蒙』——を中心に」『小野蘭山』小野蘭山没後二百年記念誌編集委員会 八坂書房

関西大学博物館 2011『関西大学博物館蔵本山コレクションの由来』

小曾戸洋 2015「杏雨書屋のコレクション」『日本医史学雑誌』第61巻第1号 一般社団法人日本医史学会

杉本つとむ 1974『小野蘭山 本草綱目啓蒙——本文・研究・索引——』早稲田大学出版部

武田科学振興財団杏雨書屋 2009『開館30周年記念 杏雨書屋図録』武田科学振興財団

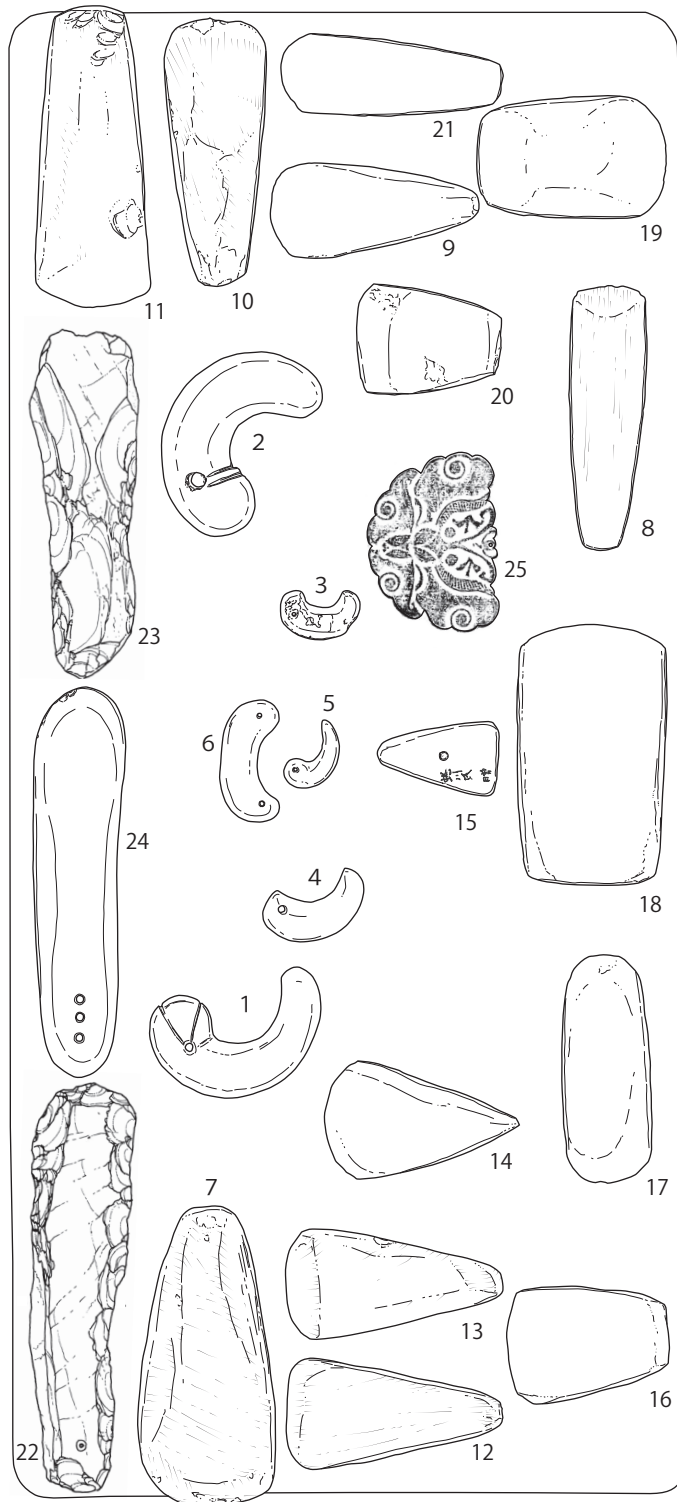
武田科学振興財団杏雨書屋 2011 第57回 杏雨書屋特別展示会「江戸時代後半期の本草学——小野蘭山——」武田科学振興財団

徳田誠志「関西大学博物館所蔵「琉球勾玉」について——大形丁字頭勾玉出現の一試考——」『関西大学博物館紀要』第21号 関西大学博物館

平野満 2011「小野蘭山の塾・衆芳軒の塾則」特別展『江戸時代の百科事始——本草学者小野蘭山の世界——』練馬区立石神井公園ふるさと文化館

藤野勝彌 1940「小野蘭山遺愛の神農像 其の他」『杏雨餘滴』

宮下三郎 2002「小野家衆芳軒の旧蔵書籍類」第39回 杏雨書屋特別展示会「小野家衆芳軒の旧蔵書籍類」武田科学振興財団



挿図 9 杏雨書屋所蔵の小野蘭山愛蔵石類 収納状況



1-1



1-2



1-3

図版1 杏雨書屋所蔵の小野蘭山愛蔵石類 「考古箱」・「鉞物箱」





図版 2 杏雨書屋所蔵の小野蘭山愛蔵石類 収納状況





図版 3 杏雨書屋所蔵の小野蘭山愛蔵石類 勾玉・磨製石斧①



図版 4 杏雨書屋所蔵の小野蘭山愛蔵石類 磨製石斧②・打製石斧・磨製石刀形石製品・その他